

生涯大学「海鳴学園」大学院

# ふるさと研究発表会

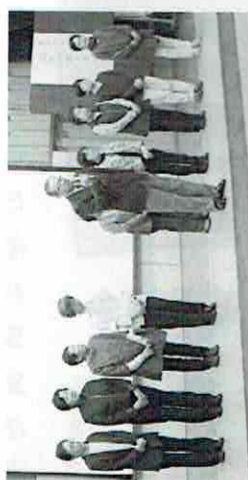


●とき 平成30年11月7日(水)  
午前9時30分～

●ところ 西部地域センター 大ホール

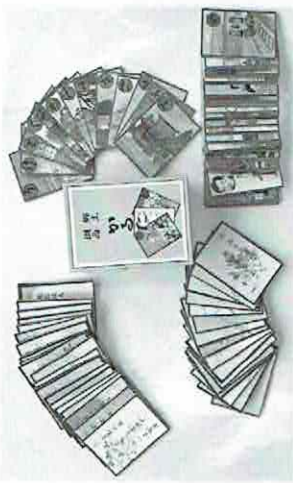
《研究発表会次第》

- 1 開 会
- 2 学長あいさつ
- 3 来賓紹介
- 4 研究発表  
「湖西市郷土カルタ」
- 5 指導講評 専任講師 山下宗茂 氏
- 6 閉 会



# 湖西市郷土カルタ

## ◆はじめの言葉



これまで多くの先輩達が調査研究されてきた郷土に関して、今回何を研究すべきか考えました。誰もが興味を持てるものであり、これまで研究されてこなかったカルタを参考にしてはどうかということでテーマを「湖西郷土カルタを通して、郷土の歴史や文化を学び、語り継いでいこう」にしました。



故 花村春曉先生

このカルタは、お年寄りや子供たちが湖西について楽しく学べるものを作ろうという趣旨で、当時教育委員会にいた山本祐一先生が中心にな

摩仏殿敷（はいぶつきしゃく）の流れの中、東雲寺が摩利支天を祀るお寺として一つの寺になりました。何度かの火災に遭いその度に移転し、今の地に建てられたのは1919年（大正8年）です。

摩利支天は、自由自在に身を隠す力を持つ陽炎を神格化したものであり、その像の多くは、猪の上に立ち弓矢を持っています。東雲寺の神札も同じような姿が描かれています。納められている像もその姿だそうす。

摩利支天は、成人の武運長久、勝負の必勝、漁師の海中安全と

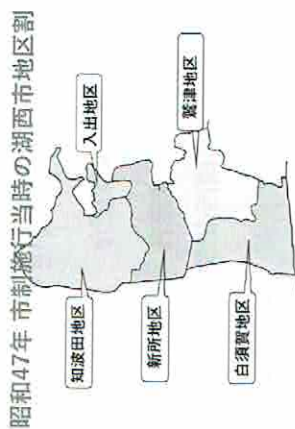
大漁満足、家内安全、子孫長久、最近では合格祈願等、諸願祈禱の寺として信仰を集めています。

又、徳川家康公の側室おまんの方が太田の豊田家にかくまわれて

いた際、毎日お参りされたことから安産祈願の寺としても知られています。

毎年2月の第4日曜日に行われる大祭は、寒い冬が終わり、春を待つ地域住民の楽しみの一つであり、この地方で一番早い祭りです。

昔は浜松方面から、漁師達が海中安全と大漁満足の祈願に船で日ノ岡港まで来て、大森の山を列をなして越えていたそうです。又遠く三河や新城から歩いてお参りにと、参道は今以上に祈願する人たちがあふれていました。特に植木市は有名で、春一番に開かれる市は果樹や花の苗木



昭和47年 市制施行当時の湖西市地区割

り読み札を作り、鷺津在住で日本画家の（故）花村春曉先生が絵を描いて平成3年に作られたものです。

郷土カルタを研究するにあたり、11名の大学院生を当時の地区別の知波田、入出、新所、鷺津、白須賀の5班に分けました。

カルタは全部で45枚あり、そのうち内容が全体にわたって区別できないものと人物は除き分けまし

## ◆知波田地区 摩利支天 いまも昔も 植木市



神座地区高山のふもと通称摩利支天の坂の中腹にある摩利支天は、正しくは東雲寺鎮守摩利支天（とううんじちんじゅまりしてん）と言います。（以下通常表記されている摩利支天とします。）

東雲寺は、建長2年（西暦1250年）に創建され、摩利支天は、鎌倉時代にお堂が建てられたと伝えられてい

ます。

初め神様と仏様で別々に建てられていましたが、明治維新後の

を求める人たちが賑わいました。

植木市の隣で開かれている弓道大会も歴史は古く、昔は武士が弓の名手を見つける為に行われていたといわれています。

近年、老朽化していた拝殿が91年ぶりに修復されました。特に



天井絵は見ると影もなく色あせていたことから、近くに住む檀家の杉浦さんが私財を投じ、京都の専門業者に依頼し修復されました。色鮮やかな赤タンや朝顔など、全て異なる63枚の草木の絵が格子状に張り巡らされた天井絵は見事です。お参りの際には是非ご覧ください。

## けふるごと 常盤まんざく 神座川



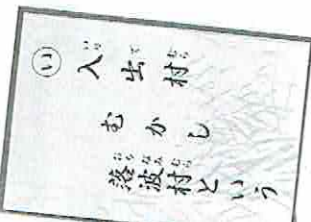
トキワマンサクは、神座地区神座川のほとりに毎年4月中・下旬にうす黄色の糸状の花が群がり咲く木です。昔、地域の人達は、変な花の咲く木だなど共同湯の焚付け等にしていたそうです。

ところが、昭和52年3月に遺伝子を研究している熊本大学の先生が調査に訪れ「これはトキワマンサクと

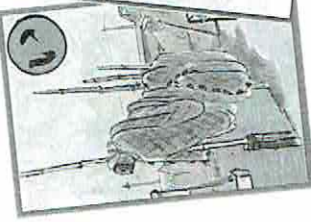
いう貴重な植物で、群生地は熊本県と三重県、そして湖西市神座の3か所のみで湖西市は北限にあたる」と教えられました。

### ◆入出地区

#### 入出村 むかし 落波村という



入出は、その昔、笠子の庄、大知波郷から分離し、思名(おんな・ヤマハリノナ西側)にわずか30戸余りの集落であったと伝えられています。



その後、漁業の都合の良い東海岸に漁師の寝る小屋(寝小屋)を作り集落根古屋となつていき現在の入出の基礎となりました。

入出という地名の由来は戦国時代にさかのぼります。浜名湖を見下ろす宇津山に16世紀初め今川義元の父氏親が三河攻略の足掛かりとして宇津山城を築城し武士の支配が始まりました。

宇津山の麓にある正太寺は1467年に創建され、そのち宇津山城主により本堂が建立されました。本尊聖観世音菩薩のほか江戸時代の木造毘沙門天像(市指定彫刻)などが収められています。



また4世湯岩和尚の手記が残されています。当時の地名は落波(おちなみ)でしたが、永禄4年今川の重臣だった城主朝比奈紀伊守泰赤が落城につながる一字を嫌い人手(いりて)と改めたとされます。武将らしく領地を手に入れるという願いを



その後同年12月に静岡県天然記念物に指定されました。当初指定を受けたものの、保護活動の体制づくりは中々進まなかつたようです。

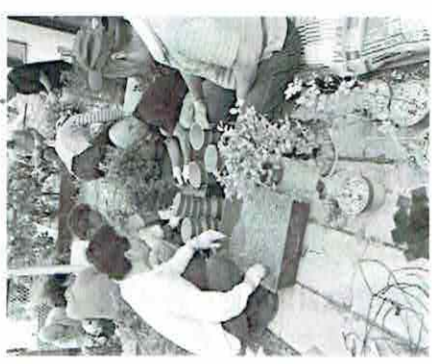
17年後の平成6年ふるさと創生事業に関連し、天然記念物を村おこしの起爆剤として活用することになり、活動を定着させる環境ができました。数年の試行錯誤の末、挿し木づくりも成功し、公共施設や神座地区の家庭に苗木を配り、新聞で紹介されたことで見学者も増え一歩一歩「マンサクの里づくり」が定着してきました。

そして平成11年「第一回トキワマンサクまつり」が実施され、今年(2023年)は第20回を迎えました。

毎年6月中旬、推進会の人達は集落センターでマンサクの挿し木作業等を行います。



挿し木された鉢は各自家に持ち帰り世話をしています。育った苗木はマンサクまつりで販売し、売り上げはマンサクを守る為のPRや保護、周辺整備などの活動資金に使われています。



この様な努力があり毎年マンサクまつりには、多くの人が訪れ賑わっています。

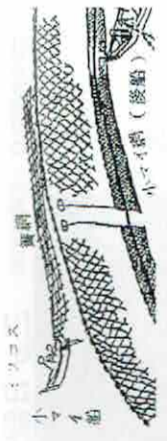
#### 地名の変遷

- 入出村去 落波
- 永徳 宇津山城主朝比奈
- 紀伊 湯岩 湯岩 落波 改入手
- 慶長 改入手
- 正太寺の四世
- 湯岩和尚の手記



込めて改名したのでしよう。

1610年「慶長の末」この頃はすでに徳川家康の治下であり、当時の入出村は浜名湖の漁業の特権を得て漁として栄え、船の出入りの盛んな地と云うことにちなみ、現在の入出(いりて)に改めたとされます。入出村は、漁業と水運の面で、浜名湖の拠点であったと思われる。



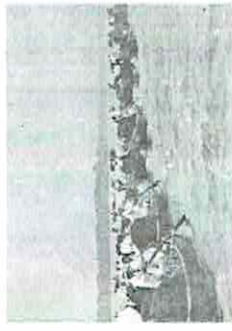
れています。

それは、女竹を編み並べてその上に網を張り、ボウが飛び込むとその重みで袋状になり、竹はフロートの役目を果たす浮置網という漁具でした。こうして囲い網の周囲に罫網を敷き並べて、ボウが跳ねて逃げるのを防ぐ方法があみだされました。

この考案はまさに全国唯一の発明と称するに足るものと高い評価を受けました。200人以上の漁師が大船団を組んで網を張り漁を行い、たくさんボウが「すのこ」の上で跳んでも逃げないことを願って歌ったものです。

入出の大角目網を1930年に昭和天皇陛下をお迎えできたことは大変名誉なことであり、地区の歴史を語るとき忘れられないことなのです。

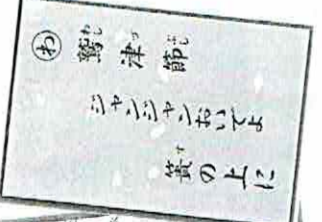
その後、一層有名になり浜名湖の名物として罫目網漁業の観光見物が戦前まで続きました。



この驚津節は、地元では水上踊りとして親しまれ、青年たちが揃いの浴衣姿で水の上で踊る有名な水上踊りで、海開きの日に女河浦の海で踊り継がれていました。

歌詞の質とは、「すのこ」のことです。

#### 驚津節 ジャンジャンおいでよ 質の上に



驚津節の一番の歌詞にある角目は角目網のことで、ボウ漁に用いる罫網の一種です。角目網の起こりは天保(1836~43)の初年頃に始まったと言われています。

その後次第に改良が加えられて、明治の初期に入出の池田亀



五郎なる先人は、ボウが飛び跳ねて逃げるのに困って、寝ても覚めてもその改良に思い更けたある晩、障子の棧にヒントを得たと言わ

水は浜名湖 浜名は鷺津  
 いさめ夜明けの トントン初角目  
 すずきはすきだし ぼらは飛ぶ  
 ジャンジャンおいてよ 蟹の上を  
 ハラハットヨイヤサ

### ◆新所地区

#### 乗って見な ぶるさど 天竜浜名湖線



天竜浜名湖鉄道は、掛川―新所原間を走る第3セクターの鉄道で、浜名湖の北側を走り、全長67.7キロメートル、39の駅から成っています。

昭和8年、国鉄二俣線として掛川―豊橋間を走り、国鉄が運営していました。

その後、赤字統

きで廃線の対象となりましたが、県や自治体から存続を求められ、昭和63年民営化され現在に至っています。

当時配布された「二俣線さようなら記念入場券」には、12の駅名が印刷され、日本国有鉄道、



静岡鉄道管理局から発行されました。

有人駅は13か所、無人駅は15でした。二俣線として全線開通したのは昭和15年6月です。新設された駅は1あります。湖西市内は、アスモ前駅、大森駅、知波田駅などです。

湖西市内ではありませんが、沿線にある古い駅舎の中には、国登録有形文化財となっている歴史的資産の宝庫として大切に扱わ



三ヶ日駅ホーム

沿線には四季を問わず、恵まれた自然の中、開業当時の面影が至るところに残り、旅を楽しむことができます。

れているものもあります。近くでは、三ヶ日駅ホーム、西気賀駅などがこれに該当します。木製のベンチと改札口は当時のもので、黒光りして見えるところに、歴史を感じ取ることができます。



### 船々々 日の岡港は 大繁盛



明治以前の湖西の交通は、浜名湖上の交通制限のため、一切の交通は新居関所を通して行われ、大変不便なものでした。

明治2年(1869年)1月に全国の関所が廃止され、浜名湖の交通が自由になりました。当時、新所東方村の庄屋であった伊藤安七郎は、浜松と豊橋を結ぶ航路を計画しました。

浜松の入野からコアミアを結ぶ航路です。明治3年(1870年)、ここに船の発着

場を作り、湖東方面の海運事業を始め、次第に人々が



伊藤安七郎(1831~1901)

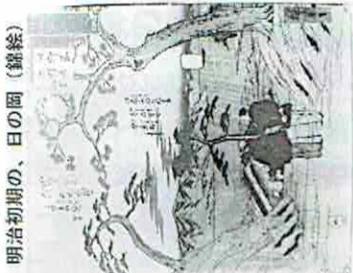
集まり、コアミアは新所西方村の外れで寂しいところでしたが、気賀、三ヶ日、東三河の物資の交流地として栄えてきました。

安七郎は、太陽が昇ると同時に光に恵まれ、日の出の勢いの意味を込めてコアミアを「日の岡」と改めました。しかし明治21年、東海道線が開通することにより次第に衰退していきました。

また、安七郎は県会議員の第1号として活躍し、教育の振興に



日の岡の旧旅館街



明治初期の、日の岡(縮絵)

### ◆鷺津地区

#### 春や春 春は桜の本興寺

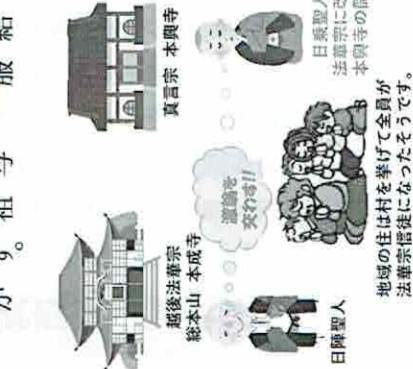


した。その結果、住僧は日陣聖人の教えに服して、法華宗に改宗しました。日陣聖人は住僧に日乗の名を与えました。それが本興寺の開祖日陣聖人の誕生となったのです。地域の住民は村を挙げて全員が法華宗信徒になったそうです。

も尽くし、日の岡の四辻に伊藤安七郎翁彰功碑が建立されました。

当時の日の岡船着き場は、昭和に入って埋め立てが進み、現在は田や道路として埋没してしまいました。現在の新所郵便局やガソリンスタンドの辺りと推測されます。

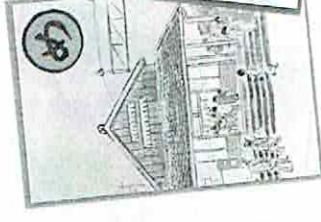
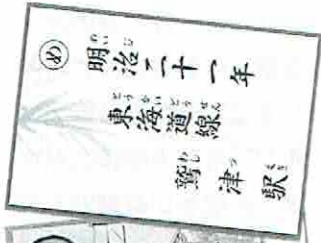
鷺津といえば忘れてならないのが本興寺です。山号を常盤山本興寺と言います。本興寺は、雲谷普門寺の真景宗のお寺でした。永徳3年(1383年)越後法華宗総本山本成寺の日陣聖人が東海地方を巡歴布教の折、本興寺に立ち寄り住僧と激論を交わ



### 明治二十一年 東海道線 鷺津駅

文化5年(1808年)本興寺にある鱧有飛作の『鷺津真景之図』には鷺津の地形が細部にわたって描かれており、湖岸地帯が河原で見渡す限りの田んぼ、集落は30軒程でした。

鉄道開通は国の方針で山を切り開き、トン

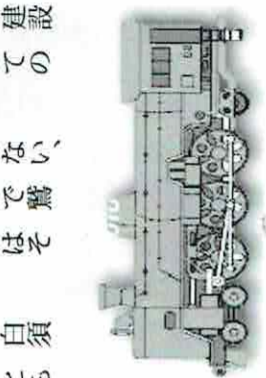
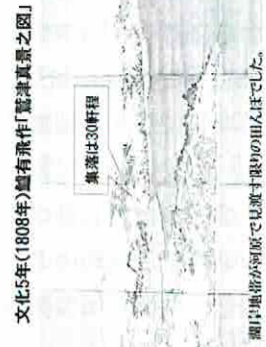


ネルを通し河に橋を架け、二本の鉄棒を真つ直ぐに打ち付け線路を作る。地域住民の土地や生活は大きく変わっていきま

した。明治21年(1888年)の春には東海道沿線上の難所である浜名湖鉄橋、架橋の建設資材を輸送するため、貨物の降ろし場としての借り停車場ができました。

しかし、列車の騒音がひどい、魚が獲れない、所有地が減る、白須賀が嫌がるものをなんで鷺津に持つてくるのか等、住民の反対がそれはそれはひどかったそうです。

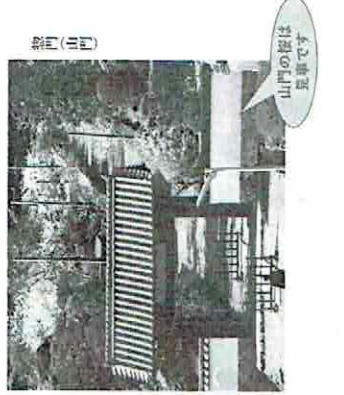
新居から鷺津経由の鉄道になったのは、白須賀にある潮見坂の急な坂が難所であったことも



文化5年(1808年)鱧有飛作「鷺津真景之図」

鷺津は30軒程

湖岸地帯が河原で見渡す限りの田んぼでした。



山号常霊山 本興寺

本興寺の山門は、旧吉田城の城門にあつたといわれ、山門をくぐると桜並木の参道が正面の本堂まで続いています。戦国時代は今川氏をはじめ、多くの武将・豪族から信仰を集め、江戸時代には徳川家康からは御朱印地を受け、10万石の格式、葵の御紋の歴史の発祥の地として重要な意味を持っています。

小堀遠州作の庭園も本興寺を有名にしてくれました。大書院と奥書院に面して楕円形に近い大池を抱えています。

300坪以上もあろうかと思われる蓬莱式池泉鑑賞式庭



本興寺の境内にある、北原白秋の有名な歌碑

彼の有名な北原白秋も本興寺が家に入り、鷺津民謡を手掛けたりと数多くの短歌も残っています。

彼の有名な北原白秋も本興寺が気に入り、鷺津民謡を手掛けたりと、数多くの短歌も残っています。



明治26年二代目駅舎 鷺津駅

一つの要因となりました。明治21年9月(1888年)、東海道線の浜松・豊橋間が開通し、その間に舞阪と鷺津に停車場が設けられました。一代目の駅舎は、バラック建てのひどく簡素なもので、腰掛すら無い状態でした。それまで馬やカゴしか知らなかった鷺津地域の寒村僻地へ、突如として文明開化の荒波が押し寄せてきました。

翌年の明治22年7月(1889年)に、東海道線、東京・神戸間の全線が開通しました。鷺津駅は利用者が少なく明治25年には停車場廃止の情報が流れ、驚いた村人は一丸となって鉄道庁に陳情しました。

翌年明治26年には鷺津駅の存置が決まり、同時に立派な瓦葺の二代目駅舎が完成しました。

明治40年8月には、浜名湖巡航船株式会社が駅裏に誕生し、鷺津が陸上と湖上交通の要とな



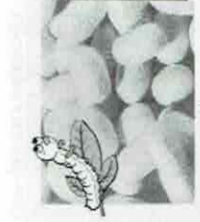
鷺津が陸上と湖上交通の要となりました

り、駅周辺には旅館や商店街が出来、にぎやかさを増していきま

### 鷺津の発展 (製糸・織布・紡績業)



絹花



繭

鷺津が駅の設置とともに大きく発展した二つ目は製糸・織布・紡績業です。鉄道が敷かれる前の鷺津は農村地帯で、人々の生活は貧困にあえいでいました。

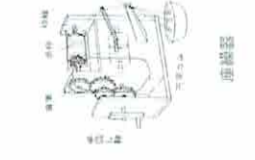
暮らしを豊かにするために、国である近代産業化の方針に沿って養蚕の振興を考え、養蚕伝習所を開き一般に広めました。多くの家庭では家中にカイコ棚を作り

「お蚕様」と呼んで大切に育てました。明治20年代には伊豆と並んで、県下の二大養蚕地にまでなったのです。更に豊橋を中心として三川・細谷と共に、湖西も全国一の生産地となりました。

明治26年より、宮崎製糸岡崎工場、宮崎製糸鷺津工場、④(マルク)製糸場などが、また、明治33年より山口織布工場、鷺津織布工場などが設立されました。

本興寺近くのレンガ造りの倉庫は、鷺津発展の基礎となった宮崎製糸の一部で、静岡県の歴史的建造物の一つとして取り上げられています。大正時代はまさに製糸業の黄金時代でした。

ちなみに大正6年の吉津村製糸業統計によれば、工場数3、設備数581、工員数男58、女675、生産額2,055,000円。また、湖西全体では静岡県製糸同業組合浜松支部(大井川以西)



「繭繰」による繰糸

手と器を動かして糸を巻き取るので生産力が上がった。2倍の生産力をもった。

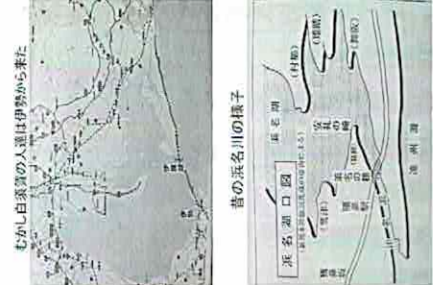
### ◆白須賀地区 白須賀は江戸から三十二番宿

白須賀の町は南は遥かに遠州灘をひかえ、北には高師山を背負い、西は三河の国と境界を接しながら、熊野往還によって通じ、東は浜名湖を水源にして西南に流れていたと考えられた浜名川がありました。浜名川が外洋に注ぐ河口地帯には帯の湊があったと言います。



白須賀という地名は、村人の言い伝

えによると、帯の湊の西岸の地域に当たっていました。当時は白砂と言ったようですが、白砂が白管に転じ、その後再転じて白須賀と呼ぶようになったと言います。



歴史を訪ねてみると、白須賀の人達は伊勢から来て、伊良湖の海岸沿いを通り、浜名川を白須賀で見つけました。浜名川を遡って行くと、白須賀の海は波も高く、当時は網もないため流れ着いた魚を拾うことぐらいしかできませんでしたが、幸い浜名湖は波もなく静かで雑みもあるため、そこへ魚を追い込み、漁をすることができました。

そうこうしている内に今切れが切れてしまい、浜名湖の水位が下がってしまいましたが、それでも今より4メートルくらい高か

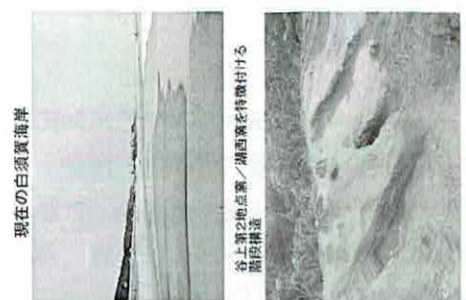
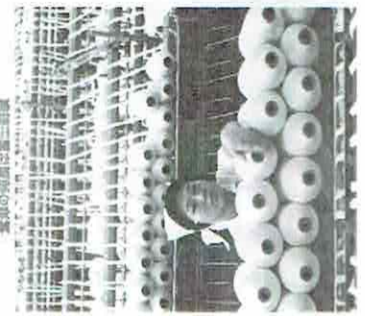


の総釜数の43パーセントを占めるなど製糸業がいかに隆盛であったかを物語っています。さらに、鷺津が飛躍的發展を遂げたのは富士紡績の誘致です。大正12年の関東大震災で被害にあった富士紡績は、遠州地方に建設候補地を探していました。

町の發展を積極的に推進するために、町外より大資本を導入するのが最善作であると考えた実業同志会が村長にこの旨進言。村長は豊田佐吉翁に相談し意見と支援を求め、ついに誘致を決定しました。

浜松市との誘致競争に打ち勝ち富士紡績は表鷺津大鼻に決定しました。工場の完成は昭和4年。当時の総釜数は、精紡機37,720釜でした。第2工場の完成は昭和14年。これにより総釜数は精紡機60,160釜、燃糸機16,000釜の大工場になりました。

富士紡の従業員(最盛時1,000)1,500名を客とする、食料や雑貨や飲食店が急増しました。これを契機に駅前や横須賀、仲町等は商業地に大きく変貌し鷺津の人口も昭和4年の世帯数は614、人口4,474人に対して10年後の昭和14年には、世帯数1,378、人口8,779人と倍増しました。



ように、白須賀宿は東海道53次の32番目の宿場であり、遠江の国の最西端(現在の湖西市白須賀)の宿場町でありました。当時は峠の上から遠州灘を一望でき、広重の浮世絵にも出てくる潮見坂は、富士山が見える西方の限界と言われた景勝地の出発点でもあり、賑わっていました。

広重の絵でも、大名行列の一行が黙々と坂を下ってくる様子、道の急勾配を感じさせる立体感が出ています。

つたさうです。白須賀には粘土がたくさんあることから、これを焼く窯も100から150くらいあったさうです。郷土のカルタにある



庄とよんでいます。宿場やその他色々な施設は、潮見坂の上の高台にある現在地に移されました。

天保年間の記録では、宿場としては中規模であり、宿場が廃止された後の1889年に白須賀町が成立、1955年に湖西市(現在の湖西市)に編入されました。

明治の東海道本線敷設では、東の新居宿から白須賀宿へ至る潮見坂の勾配が蒸気機関車運転の障害となり、そのため浜名湖沿岸の鷺津経由となつたため、白須賀の町は現在も一部当時のままの家並みや面影を残しています。

一方、当時地形の関係で鉄道が鷺津の方へ迂回されたことにより、今までどおりのきれいな空気、自然環境が保たれたことを示す、次のようなお話を聞きました。

「東海道本線沿線の鷺津のほうは、蒸気機関車の煙が多く、結核など病気の人は空気の良い白須賀へ来れば治る」と言われ転居してくる人もいたさうです。

江戸時代、宿場町として栄えた白須賀は、旅人を相手にした商業が中心でしたが、明治3年10月、政府より、本陣、脇本陣を廃止するよう通達があり、また明治9年1月、浜名湖に蒸気船が就航したことや、明治21年9月に東海道線の浜松―豊橋が開通したことにより、旅人を相手にした商売は衰退していきました。

しかし、半農半漁であつた白須賀は、明治の頃から昭和の初期まで養蚕が盛んになり、農家では桑を植え蚕を飼うようになり、



白須賀に残る昔のままの町並み

### 元宿は 明応津波で 総流れ

しかし、坂下の元宿は明応の大津波で流されて大きな被害を受けました。残つたのは、現在のゴルフ場に入る信号より西に300メートルくらい行った所を右に曲がった小高い場所に左右5軒だけ残り、今でもその場所を5軒





昭和15年頃まで製糸工場が各地で開業され、生計を立てていました。

昭和26年に国道一号線が新居町駅から境川まで開通したことにより、交通量が増えましたが、東名高速道路の開通以後は減少し、沿線商店では苦戦を強いられました。

しかし、現代では笠子原台地に多くの企業が進出し、白須賀は今、工業の町と言えるほど発展しています。

### ◆研究のまとめ

ふるさと研究のため調査した「湖西郷土カルタ」は、歴史に係るものと無いものがありました。仲間と共に図書館で調べる楽しさ、目的に向かって語る楽しさを味わいつつ、身近に親しんでいたお寺や行事に深い歴史があることを知り、本当に学ぶことの大切さを自覚しました。

海鳴学園ふるさと研究をきっかけに調査研究ができたことはとても有意義でした。

「湖西郷土カルタ」は大人も子供も誰でも楽しめる身近なものです。歴史あるふるさと湖西を誇りに思い、後世に引き継いでいく為に、今後も「郷土カルタ」の普及に努めると共に、市のイベントなどに積極的に参加し、湖西市の良い所を発見し、多くの人に伝えていきたいと思ひます。

### ◆参考文献および写真・画像引用

湖西カルタ  
湖西風土記文庫 暮らす……………湖西市  
行きかう……………"  
振り返る……………"  
語り継ぐ……………"  
祈る……………"  
湖西を築いた人々……………"  
静岡県 湖西町のすがた 1963……………湖西町役場  
湖西の歴史探訪……………彦坂良平著  
マイタウンKOSAI 1986……………湖西市勢概要覧  
湖西の文化第15号 旧五ヶ町村誌・湖西市文化研究協議会  
マイタウン知波田・人出・新所 鷺津・白須賀・白須賀ニユータウン  
禮運寺発行月刊誌(枯木亭)

### ◆お話を聞きした方、資料を提供して頂いた方

- |               |         |
|---------------|---------|
| 礼運寺 様         | 山本 祐一 様 |
| 岩松寺 様         | 守田 住夫 様 |
| 東雲寺 様         | 石田 奨 様  |
| 正太寺 様         | 石田 博嗣 様 |
| 本興寺 様         | 西尾 昌武 様 |
| 天竜浜名湖鉄道新所原駅 様 | 松本 良之 様 |
| おんやど白須賀 様     |         |